



平田 京子

INTERVIEW 02

リスクについて話そう

—先生の研究分野、専門をお聞かせ下さい

大学での研究分野は、住宅の安全性です。例えば、構造安全性、防犯安全性、火災安全性、家庭内の事故とかも安全と捉えていて、それから健康に対する安全性。いわゆる、シックハウスみたいなものも扱ってます。あとリスク。危険を定量的に表していくとリスクの形になるんですけども。

—リスクにも色々あるんですね

今一番自分が専門として研究しているのがリスクコミュニケーション。住宅を買おうとしている人が設計者の人と話をしても、構造の安全性ってあまり話をしないじゃないですか。だけどそういうことがあると、耐震偽装みたいなことが起こったときに裏切られたこととなりますよね。そういうことが少なくなるように、前もって説明を聞いて納得して入居してもらうための活動をしているのが一番の専門なんです。設計者がリスクも含めて説明しなきゃいけないので、正確には専門の人の意識を変えてくださいと言っている段階ですね。それがリスクコミュニケーション。

—では、今回取り上げて頂いたプロジェクト(22.23P参照)についてお聞かせ下さい

今回のプロジェクトでは、避難所での生活がうまく運営されるようになっていう話をやっていますね。防災って今まで行政の人が考えててくれていたけど、地震が起こるとと行政の手なんかまわりっこないじゃないですか。でも本当は、家を失った被害者自身が避難所を利用するので、自分たちで考えないと。今までみんな家族と住んだことはあっても、体育館などでいきなり多人数と住んだことはない。そうすると、全然見知らぬ他人と暮らさ

なきゃいけない、更にプライバシーも、仕切りさえない。そういう状態でうまく生活が出来るんだらうか、っていうことを考えると、ちょうどその体育館は1つの新しい家みたいになるわけだね。だから、避難所での生活は住居のテーマとびったり合うのね。

ですが地震後は人の心がささくれているので、色々なトラブルが起こるんですね。例えば、阪神大震災での有名な事例で、支給されたパンが全員分より足りなかった。足りないものを配れないということで全部捨てたんです。家も家族も失っているすごい深刻な問題を抱えた人達が、また人間関係のトラブルを抱えるのを少しでも減らそうということで、避難所での生活を支援するような活動をしていて。

2年がかりで、去年は住民の人が避難所での生活をしてったらいいかというマニュアルが出来て、それが杉並区で進んでるっていうことが分かったんです。

それで、去年はヒアリングを行いました。2007年度は、どんなトラブルに巻き込まれるかを卒論生が考えて、ゲーム形式で紹介してそれを住民の方に実際にすぐろくでやってもらい、どんなトラブルをどういう風に解決していきましょうかっていうそれが卒論になりました。住民の方の反応が、「避難所って区が運営してくれるんじゃないんですか、なんで私たちがやるんですか」って言われて、ギャップがありすぎて道は遠いなあって思ったんですけど。そういうことを先に知っておけば、学生さんの専門知識が何かサポートに生きてくるんだと思うんですね。

—他にはどんなことをされているんですか

文京区での「防災危険度マップ」を作りました。区役所からもらってきた情報を時間別に必要な、発生後すぐとか1週間くらいした

PROFILE

日本女子大学家政学部住居学科准教授

1987年 日本女子大学家政学部住居学科卒業
1990年 同大学大学院家政学研究科住居学専攻修了
株式会社大林組
尚綱女学院短期大学助専任講師
助教授を経て現職
2004年 The University of British Columbia
客員助教授 (Canada) 博士 (学術)

時とかに何段階かに分けてマップを作ったんです。本当はハザードマップって言って、地震でこの地域が危ないですよっていうのはすでにホームページで公開されているんだけど。危険物が置いてある場所とかそういうのはあまり公開されてない。それを見てる人も少ないし、理解して日頃自分の家にとってある人も珍しいので、これはもっと普段から手元に置いて学習してもらいたいですね。

—平田先生は学生の時に大宝律令を調べられたと伺ったんですが、最初は建築法規に興味があったのですか

スタートは建築法規の歴史をやっていて、日本の建築の法規の歴史って、1番最初が倉庫の防火規定から始まるんですね。防火って日本は、特にずっと悩まされてきたじゃないですか。だから、そこから始まっているのって面白いなあって。今ある規定がどういう根拠でできているかを、構造規定を中心に遡っていくと、要は安全性のレベルに関して、年代ごとにどういう考えがあったかをまとめることになるじゃないですか。安全の考え方を追っていくことになったので、私の専門の安全性ということにもつながっているし。最近の設計法は性能設計法じゃないですか。ですから、安全の性能を目標を決めてそれを設計する、というようなことになると、まさに歴史なことにつながるし、性能設計ともつながる。そういう意味では、割と流れは一貫してますね。

—安全の研究が発展して、それを説明しようと考えられたのでしょうか

そう。今は説明しないと。今までは、安全性のレベルについて議論してたのは専門家の人達だけで社会に問いかけたことはなかった

んです。だけど、阪神大震災で家が壊れて、一般の方は壊れないと思ってたので不信感もった。ということは、やっぱり説明をしないでくっちゃいけない。となると、今度は専門家の危険性とか安全性のレベルとかの説明責任が生じる、ということに気がつき始めたのが1995年以降なんですね。で、今はそれが説明だけではなくて、専門化と市民の対話へと変わってきている。

—地域に建物の安全性を伝えていくために、クリアしなければならない課題はありますか

チャンネルは結構持ってるんだよね。私たちが講座を開いたりすることはできるんですけど、集まってくる人が少ないんですよ。引き込んでしまえばこっちのものではあるんだけどね。大事だとは思っても、防災に関してのモチベーションが維持できないし。どんなに危機になっても“自分は大丈夫だ”っていう根拠のない安心感があるのは、私たちの誰もが持っているの。だから本当に気を付けないとね。伝えたいことは山ほどあるんだけどそれをどのように市民を引き込んでくるかが課題ですね。

だから、ちょっとずつ意識を変えるしかないんですね。ここのLCCの講座(*1)で防災の講座をやると市民の人が来るじゃないですかそれで受講者のうち受講のコースが終わったときに、『私は今まで危険があることに気が付きませんでしたけど、危険が分かったので家を建て替えることにしました』っていう受講者がいて、効果があったと感じましたね。

(*1)
【LCC講座】
Lifelong Learning and
Communication Center 日本女子大学の生涯学習総合センターで公開されている講座。